

# 若者たちが使用する「ぼかし言葉」 「～かな、みたいな」と「～って感じ」の語用論的機能

洞澤 伸

(2010年11月30日受理)

## The Pragmatic Function of the Ambiguous Expressions "kana mitaina" and "te kannji" among Young People

Shin HORASAWA

### 1. 問題提起

本稿の目的は、若者たちがよく使う「ぼかし言葉」のうち、「～かな、みたいな」および「～って感じ」という二つの表現における語用論的機能の相違点を明らかにすることである。

これらの二つの表現の具体的な使用例として、それぞれ、たとえば、次の(1)～(4)および(5)～(8)のようなものがある。なお、各用例の前後には<使用される場面>および(使用者の性別と生年)を記してある。

- (1) <まわりの友達がうるさい時>「ちよつとうるさいかなー、みたいな」(F,'89)
- (2) <試着室から出てきた母に感想を求められて>「ちよつとなしかな、みたいな」(F,'91)
- (3) <バイトの人について話すとき>「もう少し頑張ってくれてもいいかな、みたいな」(M,'91)
- (4) <友達に遊びに行く場所を提案する時>「カラオケ行きたいかな、みたいな」(F,'90)
- (5) <貸していた本を返してもらったときに>「これはマジ泣き系って感じじゃない?」(F,'85)
- (6) <誰かが偉業を成し遂げた時>「ほんつとすごいよね、って感じなんやけど!!」(F,'88)
- (7) <ムカムカしたとき友達に>「腹がたつたって感じ」(M,'90)
- (8) <友人に何かぐちってるとき>「もうちよつと他に言い方あるだろって感じでさ」(F,'87)

「ぼかし言葉」である「～かな、みたいな」および「～って感じ」には、対象への非難、注意、否定、意見、要望、印象または自己の心境・感覚の間接的な表明などの様々な用法があることが

明らかになっている(原2009)。本稿では、両表現が否定的な文脈において使用される場合、両者の間には相異なる語用論的機能が認められることを示す。

「ぼかし言葉」とは、物事を断定しない曖昧な言い方をする一連の表現である。それは「断定を避け言葉尻を濁したり、自分の意志を譲歩形の言葉で述べたりすることによって、自分の意見が相手にストレートにぶつかることを避ける」(中山1989:14)ための表現である。「ぼかし言葉」には、「発話(言語行為)の設定する対人関係を緩衝する」(辻1999b)という語用論的機能、すなわち、発話することによって生じる対人関係の軋轢を調節する緩衝機能が認められる。このことについては、分析の中で具体的に言及する。

「(平成16年度)国語に関する世論調査」(文化庁2005)では、「ぼかし言葉」の使用頻度についての調査が行われている。この調査は平成11年度にも行われており、そのときの結果と比較対照させて提示されている。それによれば、「ぼかし言葉」は年齢が若ければ若いほどその言い方をすることが「ある」と答える人の割合が多い。そして、平成11年度と平成16年度の調査結果を比べると、高齢層においてはあまり変化がないが、若年層では「ぼかし言葉」の使用について増加傾向が認められる。そこには、現代の若者たち特有の心理が見て取れる。佐竹(1995)(1997)によれば、若者たちは自分の発言の正当性や妥当性に対する不安、聞き手の考えと異なることへの恐れ、また、そのことによって仲間から浮いてしまうことへの恐れを持っているという。さらには、聞き手からそれらのことを指摘されることも恐いのだという。そして、若者たちの「ぼかし言葉」の使用はそうした不安や恐れに対する言語的方策(ストラテジー)であると述べている。また、「ぼかし言葉」は表現を和らげるものであり、その表現法を“和らげる”という意味で「ソフト化」と呼んでいる。「ソフト化」は、事実と言及しながら断定回避表現やぼかし表現によって発話にクッションをつけるという点において婉曲表現とは大きく異なるという。

本論では、これらのことを踏まえ、「～かな、みたいな」と「～って感じ」の二つの表現が否定的な文脈において使用される場合に限定して、その語用論的機能の相違点を探る。その際、表現の対象となる事象とそれへの聞き手の関与度ということに着目して考察する。なお、“否定的な文脈”とは、非難、注意、否定、不平、愚痴など言い表す文脈を指すものとする。

これまで、発話の文末表現である「～みたいな」についての研究として、たとえば、辻(1999a)(1999b)、前田(2004)、加藤(2005)、星野(2008)、大場(2009)、メイナード(2005)(2009)などの論考がある。他方、文末表現としての「～って」については、たとえば、守時(1994)、岩男(2003)、メイナード(2005)、鈴木(2007)などの研究または一部指摘がある。しかし、本稿で示すように「～かな、みたいな」と「～って感じ」という二つの具体的な表現の語用論的機能の相違点を対照的に明らかにしようとする研究はこれまでに行われていない。

本論で分析の対象とする用例は、筆者が勤務する岐阜大学において2006年～2010年の5年に渡り、毎年、主に1、2年生の学生に対して行った「ぼかし言葉」についてのアンケート調査によって収集したものである。この調査では、実際に使用したことのある「ぼかし言葉」の具体的な発話例をそれを使用する場面と共にあげてもらった。調査の対象となったのは、合計636人(男性225名、女性410名、性別不明1名)である。そして、収集された全用例から非難、注意、否定、不平、愚痴など言い表す否定的な文脈において使用されているものをすべて抽出すると、「～かな、みたいな」の用例は137件、「～って感じ」の用例は105件あった。以下、これらの用例を対象に分析を進めることにする。

## 2. 分析

### 2.1. 「～かな、みたいな」について

否定的な文脈で使用される「～かな、みたいな」の具体的な用例には、たとえば、次の(9)～(28)のようなものがある。

- (9) <ミーティングに参加しなかった友達に対して>「本当は参加して欲しかったかな、みたいな」(F,'91)
- (10) <友達に言いたいことがあるとき>「私は納得がいかないかな、みたいな」(F,'91)
- (11) <うるさい人に注意する時>「もうちょっと、ボリューム抑えてほしいかな、みたいな」(F,'92)
- (12) <友人が重要なメールに返信するのが遅く、その理由に不満があるとき>「もうちょっと早くメール返して欲しかったかな、みたいな」(F,'90)
- (13) <物を壊してしまった友人に対して>「もう少し気をつけてほしかったかな、みたいな」(F,'92)
- (14) <友達にがっかりしたような場面で>「もう少し空気読んでほしかったかな、みたいな」(M,'89)
- (15) <サークルでミーティングのとき>「ここの部分はもっとこうしたらよかったかな、みたいな」(F,'91)
- (16) <後輩に軽く注意するとき>「それは違うかな、みないな」(M,'91)
- (17) <サークルで友達がミスをした後で>「あれできてたら勝ってたかな、みたいな」(M,'91)
- (18) <友達が遅刻してきたときに>「メール欲しかったかな、みたいな」(F,'90)
- (19) <少し味が薄い料理を食べた感想を友達に聞かれて>「もう少し塩が多くても良かったかな、みたいな」(M,'90)
- (20) <反対の意見を言うとき>「自分はそれに賛成できないかな、みたいな」(F,'91)
- (21) <友達に注意するとき>「ちよつとうるさいかな、みたいな」(F,'90)
- (22) <野球でチームメイトに皮肉まじりで言うとき>「俺まで打順をまわしてほしかったかな、みたいな」(M,'89)
- (23) <弟に怒る時、なるべく冷静に怒ろうとしている時>「もう少し落ち着きがあるといいかな、みたいな」(M,'91)
- (24) <仲の良い友だちと話しをしていて、少し嫌味を言われた時に>「今ちよつとイラッとしたかな、みたいな」(F,'88)
- (25) <友人に後で文句を言うとき>「やっぱ、ラーメン食べたかったかな、みたいな」(M,'85)
- (26) <仲のよい友達に注意する時>「静かにしてほしいかな、みたいな」(F,'85)
- (27) <ごはんのときの親との会話>「なんであんまり食べないの？」—「今日は肉が食べたかったかな、みたいな」(M,'88)
- (28) <友達がきつい言い方をした時に>「もうちよつと優しく言えんのかなあ、みたいな」(F,'88)



つまり、「～かな、みたいな」(および「～って感じ」)には、発話者を聞き手と事象が位置する対話場面の「地のレベル」(ground-level)から「メタ言語のレベル」(meta-level)に移動させて当該の事象に言及させるという語用論的機能が認められる。この意味において、「～かな、みたいな」(および「～って感じ」)を使用すると、発話者は二つの発話レベルに位置するという二重構造を持つことになる。より分かりやすく言えば、発話者は発話場面において聞き手と向かい合いながらも、当該の事象を第三者の発言として間接引用するような形で客観的に言及するようなことになる。そのために発話者は事象に対して“距離”をおくことになり、その結果、聞き手へのインパクトを和らげることができるのである。発話者は「～かな、みたいな」と言った後で聞き手の表情や反応をうかがうこともできる。

なお、補足となるが、「～かな、みたいな」は次の(31)のように冗談っぽく聞き手に注意を与えるようなときにも用いられることがある。

(31) <友達に冗談っぽく注意する時>「もうちよつと考えて欲しかったかな、みたいな」(F,'90)

この(31)においては、「もっと考えて欲しかった」という発話者の聞き手への非難の衝撃が「～かな、みたいな」によって緩和されて冗談っぽい軽い注意へと変容するのである。

以上、否定的な文脈における「～かな、みたいな」の用例を分析した結果、発話の対象となる事象は聞き手が何らかの形で直接関与していることが分かった。また、「～かな、みたいな」という表現を使用すると、「発話主体のメタ化」というそれが持つ語用論的機能によって、発話によって作り出される発話者と聞き手(事象に直接関与する本人)の間に生じうる不和や衝突が緩衝されることを述べた。

## 2.2. 「～って感じ」について

否定的な文脈で使用される「～って感じ」の具体的な用例には、たとえば、次の(32)～(51)のようなものがある。

(32) <サークルのメールが一日に何十件と回ってきた時に友達に>「ほんと、うっとうしいって感じなんだけど」(F,'90)

(33) <友人に愚痴を言っている時>「マジうざいって感じ、あいつ」(F,'90)

(34) <誰かに注意されたことを友達に話しているときに>「言われなくてもわかってるって感じだよ」(F,'90)

(35) <友達に不満を言う時>「後ろの人黙れって感じ！」(F,'90)

(36) <自分の話ばかりしている人のことを親に話すとき>「誰もそんな事聞いてないのにさ、うっとうしいって感じ」(F,'87)

(37) <友達が約束していた時間に来なかったのもう一人の友達に>「すごいムカつくって感じ」(M,'85)

(38) <友達に過去にあった出来事への自分の気持ちを言うとき>「ありえんって感じやんな」(F,'90)

(39) <友達にムカついたことを話すとき>「まじありえんって感じ」(F,'90)

(40) <あ然とした出来事について後から友達に話すとき>「え!?って感じだったよ」(F,'91)

- (41) <親から送られてきたうっとうしいメールを友達に見せるときに>「ほんと、うざいって感じする」(F,'91)
- (42) <サークルの会議などの開始の時に>「早くしてって感じやね」(F,'90)
- (43) <まったく片付けを手伝わぬ友達ことで他の友達に話しかけて>「手伝えって感じだよねー」(F,'91)
- (44) <情報が遅く回ってきたときに友達や話している相手に対して>「もう少しはやく言って感じ」(F,'91)
- (45) <友達と腹立たしいことが起きたことを愚痴っている時>「もう、ふざけんなって感じ」(F,'88)
- (46) <オーダーをとってもらうため店員を呼んだのにも関わらず、「えーっと、どうしよう」と言っている人を見た時>「早くしろよって感じ」(F,'88)
- (47) <あることに納得できずその不満を友達に話すとき>「いや、それはないやろ！って感じでさ」(F,'89)
- (48) <理不尽な出来事に会った時>「ありえないって感じなんだけど!!」(F,'89)
- (49) <友達にあいつどんな奴やった？と聞かれて>「何かうぜーって感じ」(M,'87)
- (50) <友達にグチるとき>「私、今日と明日、連続でレジュメ作らないといけないなだわー。『死ぬということですか？』見たいな感じ」(F,'86)
- (51) <誰かのウワサをする時>「周りのこと全然気にしてないって感じか、自己中心って感じ」(F,'88)

これら(32)～(51)における「～って感じ」は、いずれも否定的な文脈で使用されている。たとえば、(32)ではサークルのメールが頻繁に着信することのうっとうしさを友達(その事象には直接関与していない第三者)に伝えている。(33)では不快に思えるある人のことについての愚痴を友人(第三者)に話している。(34)では他人から何かについて注意されたことを不満に思って、その思いを友達(第三者)に伝えている。(35)では後に座っている人のお喋りがうるさく、そのことに対する不満を友達(第三者)に伝えている。(36)では自分の話ばかりしている人のうっとうしさを親(第三者)に伝えている。そして、(37)では約束していた時間に来なかった友達への苛立ちをもう一人の別の友達(第三者)に伝えている。その他、(38)～(51)もほぼ同様に説明することができる。これらのいずれの用例においても、発話者は当該の事象とは直接関係のない第三者である聞き手に事象についての非難、否定、不平、愚痴などの否定的な思いを伝えていることが分かる。また、これらの用例においても聞き手は、「～かな、みたいな」の場合と同様に非常に多くの場合、友人関係にある相手である。

なお、「～って感じ」には、たとえば、次の(52)～(55)のように聞き手に共感を求めるような場面で使われる用例がある。

- (52) <友人にグチを聞いてもらうとき>「あれはまじでありえんって感じせん？」(F,'87)
- (53) <バイト先でさぼっている人のことを別の人に言うときに>「もっとしっかり動けって感じしない？」(M,'88)
- (54) <何か腹立つことがあって、相手に同意を求める>「もっと空気読んでよって感じじゃない？」(M,'87)

(55) <6月に鍋パーティーをすると友人が言い出した時に>「今って鍋って感じじゃなくない？」(M,'89)

これら(52)～(55)では、発話者いずれも聞き手(第三者)に共感を求める内容となっている。たとえば、(52)では発話者は辛い経験をした何らかの思いを愚痴として聞き手(第三者)に伝えて共感を得ようとしている。(53)ではバイト先でさぼっている人への非難を別のバイトの仲間(第三者)に伝えて同意を得ようとしている。その他、(54)(55)も同様に説明することができる。「～って感じ」における事象は第三者としての聞き手の関与度が低いからこそ、これら(52)～(55)のように疑問形で聞き手に共感または同意を求める表現にもなり得ると考えられる。他方、否定的な文脈において使用される「～かな、みたいな」においては、「～かな、みたいな？」のように疑問形で聞き手(事象に直接関与する本人)の共感を得るような使用例は今のところ見つかっていない。それは、話者にとって否定的であり、かつ、聞き手が直接関与する事象について聞き手(本人)に共感を求めることは人間の言語行動として想定できないからであると考えられる。

以上、否定的な文脈における「～って感じ」の用例を分析した結果、非常に多くの場合、聞き手は第三者として当該の事象には直接関与していないことが分かった。発話者は、そのような第三者である聞き手に対して否定的な思いを伝えているのである。第三者への伝達であるので、発話者は自分の思ったまま、そして、感じたままに事象への思いを聞き手に伝えることができる。ただし、「～って感じ」の全105件の用例の中には次の(56)(57)のような用例が2件あった。

(56) <妹とけんかした時>「まじどっか行ってって感じ」(F,'87)

(57) <失言をした友達に対し>「それはないって感じ」(M,'89)

(56)では、喧嘩をした妹に対して怒りが治まらない姉が不満を直接妹(本人)にぶつけている。(57)では失言した友達(本人)に向かってそのことを非難している。つまり、これら用例においては、その事象にいずれも聞き手(本人)が直接関与しているのである。このような事例は、どのように説明することができるのであろうか。このような場合は、これら(56)(57)の「～って感じ」の部分を次の(56)'(57)'のように「～かな、みたいな」に書き替えてみると、その相違が見えてくる。

(56)' <妹とけんかした時>「まじどっか行ってほしいかな、みたいかな」

(57)' <失言をした友達に対し>「それはないかな、みたいな」

「～って感じ」を「～かな、みたいな」に書き替えた(56)'では、喧嘩をした妹に対する姉の怒りの程度は印象として(56)よりも小さくなる。(57)'では、友達に対する非難の程度がより軽いものになる。他方、(56)'→(56)、(57)'→(57)のように逆にしてみると、その程度は反対に高まると言える。このことから「～かな、みたいな」と「～って感じ」の発話場面における人間関係の軋轢を調節する緩衝機能には明確な違いがあることが分かる。もちろん、これは語用論上の問題なのであって、発話者の実際の心中とは別問題である。

先に「～かな、みたいな」と「～って感じ」には共通して「発話主体のメタ化」(辻1999a)という語用論的機能があることを述べた。以上のことからすると、「～って感じ」は「～かな、みたいな」よりも発話者の思いをより直接的に聞き手に伝える表現であることが分かる。つまり、「～って感じ」

は「～かな、みたいな」よりも緩衝機能が小さい。他方、「～かな、みたいな」の緩衝機能は「～って感じ」よりも大きい。この点において両者の語用論的機能は明確に異なる。

### 3. 結論

以上、本稿では若者たちがよく使う「ぼかし言葉」のうち、「～かな、みたいな」および「～って感じ」という二つの表現を取り上げて、それが非難、注意、否定、不平、愚痴などを言い表す否定的な文脈で使用される場合の語用論的機能の相違点を明らかにした。その結果は、次の表(58)のようにまとめて表すことができる。

(58) 語用論的機能の相違

否定的な文脈における使用		
表現	事象と聞き手の関係	緩衝機能
「～かな、みたいな」	直接関与する本人	大きい
「～って感じ」	直接関与しない第三者 (一部直接関与する本人)	小さい

「～かな、みたいな」と「～って感じ」においては、事象と聞き手の関係という点において大きく異なる。「～かな、みたいな」における聞き手は、通常、事象に直接関与する本人である。他方、「～って感じ」における聞き手は、一部の場を除き非常に多くの場合、事象には直接関与しない第三者である。「～かな、みたいな」においては、事象に直接関与する本人に発話者は否定的な思いを伝えることになる。「～かな、みたいな」は対人関係の緩衝機能はとても大きいのであり、発話者と聞き手の間に柔らかいクッションを入れるような役割を果たすことになる。対人関係の軋轢を調節するための緩衝機能が大きくなければ、人間関係に葛藤が生じてしまう。換言すれば、「～かな、みたいな」は発話者が聞き手に対して、そして同時に自分に対しても十分に配慮する言い方なのである。他方、「～って感じ」においては、多くの場合、発話者は事象に直接関与しない第三者に否定的な思いを伝えることになる。そのため、「～って感じ」の対人関係の緩衝機能は、「～かな、みたいな」より小さくてもよい。つまり、「～って感じ」においては、発話者は聞き手に否定的な思いをかなり直接的に伝えることになる。しかし、非常に多くの場合、その聞き手は事象には直接関与してない第三者であるため、人間関係にはあまり大きな問題は起こらない。ただし、一部、事象に直接関与する聞き手(本人)に否定的な思いを伝えることもある。その場合は、むしろ聞き手に対してとてもストレートに強い印象を与えることになる。具体的な個々の対話場面において、若者たちはこのような「～かな、みたいな」と「～って感じ」の緩衝機能は無意識的にはあろうが上手く使い分けられていると思われる。

本稿における分析はアンケート調査によって収集できた用例だけをその対象とした。そうした点において、この結論は限定的であり、また、暫定的なものでもあることを最後に申し添える。

## 参考文献

- 岩男 考哲(2003) 「引用文の性質から見た発話「ッテ。」について」『日本語文法』3(2)日本語文法学会
- 大場美穂子(2009) 「文末に用いられる「みたいな」慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター編『日本語と日本語教育』
- 加藤 陽子(2005) 「話し言葉における発話末の「みたいな」について」日本語教育学会〔編〕『日本語教育』124
- 佐竹 秀雄(1995) 「若者ことばとレトリック」『日本語学』14(11) 明治書院
- 佐竹 秀雄(1997) 「若者ことばと学校文法」『日本語学』16(4) 明治書院
- 鈴木 亮子(2007) 「他人の発話を引用する形式」『月刊言語』36(3) 大修館書店
- 辻 大介(1996) 「若者におけるコミュニケーション様式変化」『東京大学社会情報研究所紀要』51号 <http://www.d-tsuji.com/paper/p02/index.htm>
- 辻 大介(1999a) 『「とか」弁のコミュニケーション心理』『第3回 社会言語科学会研究大会 予稿集』 <http://www.d-tsuji.com/paper/p07/>
- 辻 大介(1999b) 「若者語と対人関係 — 大学生調査の結果から」『東京大学社会情報研究所紀要』57号 <http://www.d-tsuji.com/paper/p08/index.htm>
- 中山 治(1989) 『「ぼかし」の心理—一人見知り親和型文化と日本人—』創元社
- 橋元 良明(1995) 「言語行為の構造」『他者・関係・コミュニケーション(岩波講座現代社会学第3巻)』岩波書店
- 原 智妃呂(2009) 「「ぼかし言葉」からみえる若者たちのコミュニケーション」岐阜大学地域科学部卒業論文
- 芳賀綏／佐々木瑞枝／門倉正美(1996) 『あいまい語辞典』東京堂出版
- 星野 祐子(2008) 「コミュニケーションストラテジーとしての引用表現:発話末の「みたいな」の表現効果」、『人間文化創成科学論叢』11 お茶の水女子大学  
[http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/34652/1/14\\_133-142.pdf](http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/34652/1/14_133-142.pdf)
- 前田 直子(2004) 「文末表現「みたいな。」の機能」『月刊言語』33(10)大修館書店
- 村田美穂子(1994) 「ぼかし表現の新方向」『国文学 解釈と鑑賞』第59巻7号 至文堂
- メイナード泉子・K(2005) 「会話導入文—話す声が聞こえる類似引用の表現性—」『シリーズ言語学と言語教育第4巻 言語教育の新展開(牧野成一教授古稀記念論集)』ひつじ書房
- メイナード泉子・K(2009) 「『勝手にしろ!』「みたいな」『ていうか、やっぱり日本語だよ。』大非難、注意、否定、不平、愚痴など修館書店
- 守時 なぎさ(1994) 「話し言葉における文末表現「ッテ」について」『筑波応用言語学研究』1筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース  
<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/limedio/dlam/M40/M400032/10.pdf>
- 文化庁文化部国語課(2005) 『平成16年度国語に関する世論調査』独立行政法人国立印刷局